
ESPER-CARD (エスパーカード) ~黒~

めい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ESPER - エスパーカード CARD - 黒

【Nコード】

N6378X

【作者名】

めい

【あらすじ】

高校に入学したての坂上奈緒は、謎の青年に黒いカードを渡される。「エスパーカード？」——奈緒とその周りに巻き起こる不思議な現象。彼女の待ち受ける運命とは？ *** 学園もの。恋愛要素は少なめです。

プロローグ(1)

(1)

二人の男女は勝負の手を止めた。

「どうするこれ。何だか、ぐるぐるしちゃって終わらないんだけど」
そのすべてが白に包まれた部屋の中で、一人の男が呟いた。

男の対面に座っていたもう一人の女は、ため息をついた。

「……だれよ。暇つぶしにちょっと遊ぼうっていったの」

男は思った。お前だろ、と。

うーんと腕を組み考え込む男女のもとに、もう一人の人物が忽然と現れると、男に向かって声をかけた。

「ミゲル、交代の時間だが」

ミゲルと呼ばれた男は、頭をがしと掻いた。

「うえ、もうそんな時間かよ。どうすっかなあ……」

新たに現れた男は、そんなミゲルに尋ねた。

「……どうした？」

「これこれ、どうすればいい？」

男はミゲルが指し示した、二人の間にふわふわと漂う、白い水晶のような丸い物体を覗いた。

そして少し考えた後、男は口の端を上げて言った。

「ならば、私も参加しよう。……このカードで」

と、彼は三枚の黒いカードを取り出した。

「それだけでいいのか？」

半信半疑の様子をみせるミゲルを気にもせず、男はそのままそのカードを水晶玉の中に差し込んだ。

ミゲルは、カードが吸い込まれたその水晶を覗き込むと、嬉しそうな声をあげた。

「お、動いた」

「ようやく勝負がつきそうね。ありがとう、助かったわ。アラスタ」

女の言葉にアラスタは、

「それより、早く交代してくれ」

と素気なく言う。ミゲルは「へいへい」と返事をする、その部屋から出て行きながら、女に声をかける。

「どっちが勝ったか、あとで教えてくれよ、ルミエル」

すると女は、

「まあ、暇があつたらね」

と笑って言った。

坂上奈緒さかうえ なおは高校生になった。新しい制服に身を包み、本日入学式に向かうところだ。てくてくと山道の砂利道を歩いている。地面にじつと羽を広げて動かないトンボを避けながら、彼女は思った。自転車を購入しなくては、と。

奈緒は携帯電話を取り出した。現在時刻は朝の6時半を少し回ったところだ。

入学式の開始時間は午前9時だ。別に奈緒が今日特別に早起した訳ではない。単に彼女の通う高校が、祖母の家から徒歩で2時間かかるというだけのことである。

携帯の電波受信状態は、圏外を表している。この町は、奈緒の持つ電話会社の受信サービス範囲外だった。しかしカメラ機能は使えるし、電話帳にはなる。それに、こうして時計代わりにもなる。そう考えた奈緒はこの携帯を手放せずにいた。

左手に出現した朝焼けに光る田んぼを眺めながら、彼女は再び思

った。絶対に自転車を買おう、と。小学生以来乗っていないが、なんとかなるだろう。

奈緒は軽く伸びをすると、空を見上げた。雲ひとつない良い天気である。

昨年決まった両親の離婚により、奈緒は横浜から島根県にある母方の祖母の家に引越してきた。小学二年生までこちらに住んでいたのだが、彼女にとってその記憶はあまりない。

ただ、こちら通っていた芦田小学校は、全校生徒が合わせて50人にも満たない、小さな木造校舎だったことは覚えている。同じ教室で下の学年や上の学年の子が、一緒に授業を受けていた。

トイレも共同で、個室のトイレを開けたら、和式便所の中央に巨大なムカデがいて叫んだ。その記憶だけは今でも強烈に覚えている。

祖母の幸枝お祖母ちゃんみぢえは、7年ぶりに会ったにも関わらず、記憶の中と同じように、奈緒と弟の幹雄みきおを笑顔で迎えた。彼女の入学式も朝の農作業が終わったら、幹雄と一緒に見に来るといふ。今も豊饒かくしゃくとした人である。

母親は、ファッション雑誌の出版社に勤めており、一人で横浜に残って生活している。働きながら、まだ手のかかる幹雄の面倒をみる余裕はないということで、奈緒と幹雄の二人だけが、祖母の家にお世話になることになった。

忙しい共働きの両親との生活だったので、奈緒は元々幹雄と一緒に過ごした時間が多い。九つ年の離れた弟は、奈緒にとって目に入

れても痛くないほど可愛らしい。

午後からは、幹雄の小学校の入学式がある。奈緒の背負っている赤いリュックの中には、お昼に食べるためのお弁当が入っている。今日の奈緒の起床時間は朝の4時半だった。外はまだ真つ暗な中、炊飯器でお米を炊き、お弁当の用意をした。弟と祖母の分もついでに作った。朝食の準備が終わったところで、お祖母ちゃんが起きてきて、あらまあと喜んでくれた。普通に嬉しかった。制服に着替え玄関の戸を開けたところで、幹雄が起きてきて、日本人にしては色素の薄いその髪に寝癖をつけたまま、

「お姉ちゃん、いつてらっしゃい」

と言った。奈緒はそれに手を振りながら、

「行ってきます。午後には入学式いくからね。お祖母ちゃんを困らせちゃダメだよ」

と釘をさしておいた。幹雄は準備が遅い。テレビを見ながら着替えをするので、ズボンを履いている途中に片足を上げたまま、動かなくなったりするからだ。幹雄、と声をかけると再び動き出すのだが、どうにもものんびりした性格のようである。半年前の幹雄の行動を思い出すと、それは常にといい訳ではないようだ。

まだシャッターの閉まっている商店街の通りを抜け、高校が近づくにつれて、同じ制服を着た人たちがちらほらと見え出した。芦田高校の制服は、男子が黒の詰襟、女子が黒のセーラー服である。そんな黒い集団の中、女子の髪飾りが彩りを添えている。

中学の時から友達なのか、すでに何人かのグループで登校している人もいる。一人で歩いている人も多く目についたので、奈緒は少しほっとした。皆の顔が少し緊張している様子で、奈緒は自分も同じような顔をしているのかと思うと、少し可笑しくなって笑った。

校門の前には、在校生の先輩であろう人たちが待ち構えていた。その中の一人の女子生徒が、私の名前を聞いてきた。そして、傍らにいたもう一人の生徒と一緒に名簿をチェックする。そして、用意してあった名札にペンをはしらせると、その名札を私の制服の左胸の少し下あたりに付けた。みると、『1年C組 坂上奈緒』と大きく書かれている。なんだか幼稚園生になったみたいで少し恥ずかしい。先輩はそのまま私に、

「入学おめでとう」

と笑いながら、黄色の紙で出来た造花をその名札の上にぺたりと貼った。さらに幼くなったように思う。しかも名札に書かれた名前がその花で隠れ、『坂』と『緒』しか見えなくなった。しかし先輩はそんなことは気にせず、式場の行われる体育館の場所を教えてください。

体育館に着くと、やはり先輩が誘導係をしていて、私を綺麗に並べられている椅子のひとつに案内してくれた。座ってから前後を見て、なるほど、先程の花の色はクラスの色を表していたのだと気付く。一学年のクラスの数が7つだからだろう。虹の色が使用されていたのだ。A組は赤、B組は橙、C組は黄、というように。赤橙黄緑青藍紫が7つのクラスに振り分けられている。左を見れば、同じ新入生が橙色の花を付けていて、右側は緑色を付けていた。

そんな風に観察していたら、新たに私の隣に案内された人物が座った。その男子生徒にも、やはり胸に黄色の造花が付けられていたが、名前は隠れていなかった。『但馬修士^{たじましゅうじ}』と読める。彼は、座りながら私に小さく会釈をしてきたので、私も会釈を返した。一年間、級友として過ごすのだ。あらん限りの笑顔を見せてみたが、すでに彼は前を向いていた。奈緒は少し落ち込んだ。

横顔の彼は、ずいぶん大人っぽい子に見える。その黒い髪の毛の無さそうな髪質は真っ直ぐで、彼の視線と同じだった。

プロローグ(2)

(2)

それから何事もなく入学式は始まり、やがて終わった。その間、隣の彼とは一言も話さなかった。

そのまま担任の先生に連れられて、1年C組の教室までやってきた。席順はあいいうえお順で、名前が書かれた紙がセロテープで、表面がつるつるの机に貼られている。

奈緒の番号は12番で、教室の机が横に6列、縦に6列ずつ並んだそこは、一番後ろの席だった。ちよつとラッキーだと思った。視力は悪くない。

少し緊張感のする空気の中、奈緒はその席に座った。前の席は女の子だった。少し茶色に染めたショートボブの髪が緩く巻かれている。にこりと笑顔で、

「私、小泉^{こいずみ}夕紀^{ゆき}っていうんよ」

と自己紹介をしてくれた。奈緒も名乗り、第一印象は好感触だ。よかった、友達になれそうだ。すると、私の右側に座った女子生徒も参加してきた。

「私は木野^{きのした}下裕子^{ゆうこ}。よろしくね」

挨拶をした彼女は、とても綺麗な子だった。黒いストレートの長い髪が腰まで届いている。目も大きくぱっちりとしていた。そう思っ

たのは奈緒だけではないようで、夕紀が直接的な物言いと言った。

「うわあ、あんためっちゃ綺麗やね」

それに対して、裕子は困った顔を少し見せて、

「そんなことないよ」

と謙遜していた。

夕紀は中学も芦田中学校出身で、この高校の近所に住んでいるという。裕子は隣町から通学しているそうだ。奈緒の2時間かかる道のりを言ったら、二人とも妙に同情してくれた。

「柏崎っていうたら、山ばっかの所やないの。そら、めっちゃ遠いわ」

と夕紀が大げさに言った。確かに一週間経った今も隣の家というのが、どこに存在するのか分かってはいないが。

そんな話をしながら、ふと左側の席を見ると、いつの間にか人が座っていた。その人物を見て、奈緒は一瞬動きを止めた。入学式で隣の席にいた男子生徒だった。確か名札には但馬修士とあった筈だ。確認しようにも座っている彼のそれを覗きこむのは、あまりにも不自然に感じた。

彼は頬杖について誰と話すでもなく、黒板の方をぼんやりと眺めていた。少し長めの前髪から、涼しげな目元がのぞいている。こちらの視線に気付いたのか、ふと彼がこちらを見たような気がして、奈緒は慌てて前を向いた。

奈緒の担任の先生は、かなりがっちりした体型の先生だった。太い眉毛が印象的だ。その先生が、黒板に『水谷 隆』と大きな字で書いた。その隣に『みずたに ゆたか』とかなを振り、相棒にはでていないぞ、と言っていたが、何のことだか分からなかった。そんなクラスの反応を見て、水谷先生は肩をがっくり落とし、

「これが時代の流れというやつか……ベーゴマ、ビー玉……」

と何やら嘆いていた。

それから先生は、これから一週間の内容を軽く説明してから、プリント用紙が何枚か配られた。それをリュックにしまいながら、奈緒は遅れて、先生のいつていたのは、あの俳優さんのことかな、と気付いたが、漢字は違う気がするなあと考えていたら、先生の「解散！」の声がして、椅子ががたがた鳴った。ホームルーム（HR）が終了したらしい。

夕紀に早速、町でお昼を一緒に食べようと誘われたが、これから弟の入学式に出るのだという、それじゃまたの機会に、と残念そうにされた。

昇降口を出ると、目の前の校庭では、入学式の今日でも野球部が練習をしていた。オーイオスという掛け声が大空に響き渡る。

奈緒は来た道を戻りながら、幹雄の通う芦田小学校への道を辿った。ここから1時間半かかる。携帯を見ると、10時半だった。知

らず知らずのうちに少し急ぎ足になった。陽気の良い今日の天気、奈緒の体は少し汗ばみ、服の裾をばたばたとあおいだ。

芦田小学校に到着すると、奈緒は早速、幹雄と祖母の事を探した。数人の父兄の姿が見えるが、その中に二人の姿は見当たらない。さてどうしようか。お弁当を先に食べてしまおうと思い、しからばどこでお弁当を食べようかと散策を始める。今日は天気が良いので、外で食べたい気分だった。

校舎裏に広がる少し鬱蒼とした裏庭は、ほぼ林の中といていい。そこにベンチが無秩序に何台か置かれている。奈緒はそのひとつを選び、お弁当を広げた。吹き抜ける風が時折、春の穏やかな香りを運んでくる。

ふと視界の中に何かが動いた気がして、奈緒はお箸の動きを止めた。顔をあげて見ると数メートルも離れていない樹木に寄りかかって、二十歳前後の男性が立っていた。誰だろう。

白い長袖Tシャツにジーンズというあっさりとした格好の彼は、薄茶色の髪の毛が風に靡なびいている。知らない人なのに、何故か懐かしい気持ちにさせるその瞳を、奈緒はじっと見つめた。

私が気付いたことを知ると彼は、ふっと微笑んで言った。

「見つかったか」

私は、口の中の物を急いで飲み込んだ。そんな私の様子に、彼はただじっと私を見て微笑んでいる。その瞳は、何故だかとても悲しそうに見えた。

「……えつと、誰でしょう？」

と私が言うと、彼は突如、懷から携帯を取り出した。

「写真、撮ってもいい？」

返事をする間もなく、シャッターの音がした。

「ちょ、ちよつと待ってよ」

私は慌てて言ったが、再びシャッター音がした。なんだなんだと慌てる奈緒に青年は、今度は並んと言い、また一枚撮る。そして固まる私の手に、

「はい」

とそれを渡した。トランプのようなその黒いカードは白文字で何やら書かれている。奈緒はその文字を目で追った。太めのアルファベットが『E・S・P・E・R・C・A・R・D』と並んでいる。

「エスパーカード？」

と奈緒は素っ頓狂な声で読み上げた。

その他に書かれているものは、『。かぎかつこの中には何も書かれていない。その下に『契約者名』の欄があるが、そこ

も空白だった。

「あの、これ、何ですか？」

奈緒が青年を見上げて聞くと、彼はにこにこ笑っている。そして、

「早く、唱えて」

と言った。奈緒は一体何を唱えるんだと思ってから、ふとそのカードを裏に返す。そこには小さな文字が並んでいる。

“この力を使役したくば、カードを胸に アラストに告ぐ。我、新たな能力を授かるものなり と唱えよ。さすればその力は汝の御許に芽生えるであろう。アラストの望む限り”

少しの行間を空けて、文字はさらに続く。

“汝、その力を消滅させるとき”

“一、その御魂を神に還す”

“二、他者が新たに契約する”

奈緒がその文章を指でさし、上目で問いかけると、青年は頷く。

奈緒は眉を顰めながら、その文章を読み上げる。

「アラストに告ぐ。我―――」

「ダメダメ。胸に当てなくちゃ」

青年の指摘にああそうか、と奈緒はカードを胸に当てた。そして気付く。文章が見えない。もう一度それを見る。暗記しなくてはいいかないのか。何度か口ずさんでから、奈緒は再びそのカードを胸に当

てる。

「アラスタに告ぐ。我、新たな能力を授かるものなり」

目をつむって唱えた瞬間、なんだか胸の奥がじんわりと温かくなった。そして奈緒の身体は――何も変化がなかった。

「あの、何ですか。これ」

青年は、にこにこしている。

「それ、絶対なくさないで。そうだな……生徒手帳に挟はさんでおくのか？」

確かにこのくらいの大きさならば、生徒手帳になんなく挟めるだろう。奈緒はその黒いカードを見て、

「え？」

と声を上げた。表面の契約者の欄に『坂上奈緒』と記載されていたからだ。いつの間に。なにこれ。

首を傾げながら顔を上げると、青年の姿はすでにそこにはなかった。

――この青年と出会い（彼女と出会い）

――彼女の運命の時計の針は（僕の運命の時計の針は）

――再び動き始めた（止まり始めた）

「プロローグ」了
第一話「奈緒、能力に目覚める」に続く

第一話「奈緒、能力に目覚める」(1)

第一話「奈緒、能力に目覚める」

(1)

案の定、幹雄はぎりぎりで入学式に参加した。お祖母ちゃんもさすがにご立腹である。もう少しその暢気のんきな性格を直してほしいと思うのだが、弟はあまり気にしない様子で、新しい小学校の雰囲気を楽しんでいる。母が用意した黒いエナメルの靴の先は、すでに汚れて真っ白になっている。

「お昼は食べたの？」

と奈緒が聞くと、勢いよく返事を返してきた。

「うん！ 歩きながら食べたよ。ねえ、お祖母ちゃん」

そうか、おいなりさんを歩きながら食べたのか。幹雄の口に歩きながら、おいなりさんをつっ込んでいるお祖母ちゃんの姿を想像して、それはさぞかし苦労したであろう、と奈緒は思った。

奈緒の記憶とは違い、幹雄の通う県立芦田小学校は、鉄筋コンクリートで出来た小学校だった。なんでも三年前に、近隣の小学校と合併して改築したらしい。一学年ひとがくねんひと一クラスしかないが、今の少子化の時代、この辺りでは一番大きな学校だった。

体育館に入っていく幹雄を見送りながら、奈緒は校庭を眺める。曖昧な記憶の中にも、校庭の角に生えている、あの大きな桜の木はあったような気がする。桜は今は丁度満開で、花びらがばんぼんの

ように咲いている。その左側に、四角い小屋が建っているのが見える。飼育小屋のようだ。

奈緒は何の動物がいるのか、興味を持って近づいてみた。コッコと鳴き声が聞こえてくる。網の向こうに見えるのは、鶏が数羽とウサギが5羽いた。奈緒のいた学校と変わらないその種類に、奈緒はいささかがっかりした。豚とかいるのかと思っていたのに。

そんな勝手な妄想に裏切られていた奈緒は、ふとその飼育小屋の前に、見覚えのある黒いカードが落ちていたのが目についた。拾い上げてみると、やはり表面には、『ESPエスパーER-CカードARD』の文字があった。青年にもらったのとは違い、中央の部分には『残留思サイコメ念読取』と書かれている。契約者名は空欄だ。裏返す。まったく同じ文章が並んでいる。いや、一部違う箇所があった。アラスタという名前の場所がルミエルになっている。

最近こんな遊びが流行っているのだろうか。奈緒が小学生の頃も、アニメの対戦カードを同級生の男子が集めていた。何が面白いのか、まったく分からなかったが。そんな奈緒も、着せ替えカードを集めていた時期があったのだが、それは棚にあげての発言である。

「ちょっと夢があつていいけどね」

と奈緒はひとり呟いた。

「奈なー緒おおー！」

と遠くからお祖母ちゃんに呼ばれ、奈緒はごめんごめんと言いながら、お祖母ちゃんのもとへと走っていった。

幹雄の入学式も滞りなく終わると、早速お祖母ちゃんに町で自転車を買ってもらう。幹雄もお揃いの白い自転車を買った。それからお祖母ちゃんを後ろに乗せ、

「もう少しゆっくり走って」

という声を軽く無視しながら帰宅した。

家ももう少しという所に長い階段が見える。永谷神社だ。頭上を見上げれば、赤い鳥居が木々の隙間に隠れながらも、ちらちら見える。奈緒の記憶の中にも、境内で遊んだ事が何度かあった。

その神社の神主さんがかなりの強面で、初めて見たときは阿修羅王が動き出したのかと思って泣いた覚えがある。実際は、奈緒たちと一緒に遊んだり、たまにアメちゃんをくれたりする、子供好きな人だった。

家に着くとすぐに、奈緒は弟と一緒に裏の畑から人参とネギを採りに行くよう、お祖母ちゃんから頼まれた。今晚の夕飯の材料だ。使い古した小さな鎌かまを渡された。

「カマキリ拳法！」

と幹雄を追いかけながら、裏の畑に奈緒と幹雄は向かうと、背中に
お祖母ちゃんの

「ふざけたらあかん！」

と怒鳴り声が聞こえた。

お祖母ちゃん家に引越してから、一週間が経っていたが、畑からの収穫など都会育ちの二人には、いまだ何かの行事のような楽しさだ。裏にある畑といってもさすがに広い。テニスコートくらいの広さはあるそれを、奈緒は手をかざして左から右へと視線を移していく。様々な種類の野菜が植えられている。

その中から奈緒は目的の葉を探し当てた。

「人参は……あ、あつたあれだね。幹雄、採ってきて」「うん！」

幹雄の返事はいつも良い。奈緒はそんな幹雄に笑って頷くと、近くに成っているミニトマトをもぎ取り食べる。うん、おいしい。それからネギはどこだったつけと探している奈緒の耳に、幹雄のたどたどしい大きな声が聞こえた。

「ルミエルにつぐ！ われ、あらたなのうりよくをさずかるものなり！」

その聞き覚えのある言葉に、奈緒は振り返った。幹雄が目をつぶったまま、黒いカードを胸に押し当てている。それから目を開けて、しげしげと黒いカードを眺めている幹雄に奈緒は近づいて言った。

「幹雄、そのカードどうしたの？」

幹雄は奈緒を見上げながら言った。

「ここに落ちてた」

幹雄が指差した先は、人参の生えている土の上だった。

幹雄の手にするカードを覗き込むと、やはりESPエスパーER - CARカー
Dドであった。契約者名には『坂上幹雄』という文字が現れている。
一体どういう仕組みなのだろうか。中央の部分には、『空間移動テレポテーション』
と書かれていた。

「ねえ、お姉ちゃん。テレポーションって何？」

そうか、それも知らなかったか。奈緒は腕組みをして言った。

「テレポーションっていうのは、あつという間に別の場所にいく超能力のことよ」

それを聞いた幹雄は目を輝かせて言った。

「じゃあ、横浜にも行けちゃうの？」

その言葉に奈緒は、やはり幹雄は母親と離れたくはなかったのだろうか、と少し悲しくなりながらも頷いた。

「じゃあ僕、今、行ってくるね！」

目を閉じ何か祈っている幹雄に、奈緒は笑った。

「はいはい。行ってらっしゃい。夕飯の時間までには帰ってきてね」

と手を振りながら、奈緒はネギを発見した。ああ、人参の向こう側にあったのか。そう思いながら、奈緒はそちらに足を進みかけ、立ち止まった。

「……幹雄？」

先程まで、幹雄がいた場所に彼は立っていなかった。慌てて辺りを見回す。

「幹雄……幹雄。どこにいるの」

隠れてないで出ておいで、と呼びかけても、幹雄の姿は見当たらない。徐々に焦り始めた奈緒は、畑の中を歩き回りながら、

「幹雄！」

と叫び続けた。もしかして、と畑の横にひいてある用水路も覗いてみる。そこにも幹雄の姿はなかった。

いい加減しびれを切らせたお祖母ちゃんが呼びにくるまで、奈緒は幹雄を探し続けた。

もうすぐ日が暮れて辺りは真っ暗になる。その前に幹雄を探さなければ、と焦っている奈緒とは反対に、お祖母ちゃんのんびりした口調で言う。

「大丈夫だわ。きつとお腹が空いたら戻ってくるけん」

ほらほら、と奈緒を家の中へと連れていった。台所はすでに、ご飯の炊けるいい匂いに包まれていた。

奈緒は夕飯の支度を手伝いながらも、時折開け放たれた勝手口の扉から、夕日に照らされ赤く染まる畑を覗いていた。

第一話「奈緒、能力に目覚める」(2)

(2)

「ただいま！」

その声は玄関から聞こえ、その後ばたばたと走ってくる幹雄の姿が現れた。

「ほら、帰ってきたわ」

ね、とにつこり笑うお祖母ちゃんの顔を横目に、

「幹雄、どこ行ってたの！」

奈緒は眉を吊り上げて幹雄に怒鳴った。幹雄はきよとした表情をして、

「横浜だよ？ そう言っただじゃん」

と言った。奈緒は仁王立ちのまま、幹雄に詰め寄った。

「それで？ 横浜のどこに行ってたの？」

幹雄は笑っていった。

「お母さんの会社だよ、ほら、これ雅美ちゃんがくれた」

幹雄が差し出したそれは、崎陽軒のシューマイだった。

「……………雅美ちゃんか？」

雅美ちゃんとは、母の会社の同僚で、時々家にも遊びに来る明るい三十代の女性だ。

奈緒はすでに台所に背を向けて、夕飯の支度に戻っているお祖母ちゃんに、

「ちょっと電話するね」

といい、受話器を取った。会社の番号は空で押せる。ピポパピと番号を押すとほどなくして相手が出た。

「はい、講永社第三編集部、藤本です」

丁度、雅美ちゃんが電話番だったようだ。

「もしもし、坂上奈緒です。母がいつもお世話になってます」

と奈緒が言つと、雅美ちゃんは、

「あら、奈緒ちゃん。久しぶりねえ」

と答えた。奈緒は雅美ちゃんに、さきほど幹雄にシュウマイを渡したかと尋ねると、雅美ちゃんは、

「いいのよ、気にしないで。ちょうど業者さんが置いていったやつだから」

と、あっさりと認めた。

「本当に、今、幹雄がそっちにいたんですか？」

と確かめると雅美ちゃんは、そうだと言う。

先程幹雄が母を訪ねてきたが、外出中だった。待っているかと聞くと、夕飯までに戻る約束をしているから帰ると言われ、ならお土産をとシユウマイを渡したのだという。

「一応、内緒ね。一人が持って帰ったって分かると、ぎゃあぎゃあうるさい人がいるから」

と何も知らない雅美ちゃんのはのん気に言った。そうですねと、曖昧な返事をしてから、シユウマイのお礼を言い、奈緒は電話を切った。

奈緒は幹雄に向き直り言った。

「本当に横浜に行ったの？」

幹雄は頬を少しふくらませながら頷いた。奈緒は幹雄のその少し色素の薄い茶色の目を覗き込みながら、静かに言った。

「どうやって？」

幹雄は言う。

「さっきお姉ちゃんが教えてくれたじゃん。テレポーションだよ」

微妙に間違っただけで覚えているが、それはこの際どうでもいい。奈緒は

眉を顰めて言った。

「よし、じゃあ見せてごらん。今からお姉ちゃんは部屋に行くからそこに10数えたら、飛んできてごらん」

幹雄は「うん!」と頷くと、目をつぶって数を数えだした。

奈緒はその声を聞きながら、急いで部屋まで走っていった。そして扉を閉めると、その扉を背にしてもたれかかった。

耳をすませば、台所で数を数える幹雄の声が聞こえている。

「……はーち、きゅーう、じゅー!」

最後の力強い声と共に、奈緒の目の前の空間が揺らめいた。そして、歪んだ幹雄の姿が現れ、それは徐々に形をはつきりとさせた。

目の前に現れた幹雄は笑っていた。

「ね、テレテーションだよ!」

そんな満面の笑顔を見せている幹雄を、奈緒はただ口を開けてみている。

原因はやはりあの黒いカードだろう。奈緒は幹雄に先程のカードはどこだと聞くと、幹雄は首を傾げた。すると、幹雄はばたばたと身体の色々なポケットというポケットを探っていた。そして、涙目で奈緒を見る。

どうやら落としたらしい。

ならば、あのカードは契約者が所持していなくても、その力を發揮するということが、と考えているところに、

「ほづら、ご飯できたよー！」

台所からお祖母ちゃんの声が聞こえた。はあい、と二人で返事をし
て、奈緒たちは食堂へと足を運んだ。

お祖母ちゃんは幹雄の空間移動に気がつかなかった様子で、何事
もなかったかのように、食事を食べている。横浜に行ったという幹
雄の話も、

「そっかい」

と話を流して、それよりも最近畑を荒らしているタヌキの存在の方
が、彼女の関心を引いているようだ。時折、

「あんの、くそダヌキが……」

と苛立った口調で呟いている。

ご飯を食べたあと、奈緒は幹雄に、あまり能力を使ったり、他の
人に言ったりするんじゃないというと、幹雄は首を傾げて、

「どうして？」

と言った。誰かに知られたら、幹雄はテレビとかいっぱい出るよう
になって、お姉ちゃんとかお祖母ちゃんと会えなくなっちゃうから
だよ、と言っておいた。幼い彼にとって、人間の心理を理解させる
にはまだ早いだろう。

それを聞いて幹雄が

「テレビに出るのはいいけど、お姉ちゃんに会えなくなるのは嫌だ」と真剣な顔をして言ったものだから、思わずぐわしっと抱きしめてしまった。幹雄が奈緒の胸の中で

「ぐるじー」

と声を上げている。ごめんごめんと言いながら、腕を緩めると、その頭をぐりぐりとなでまわした。

裏の畑にひとつの黒い影があった。

その影は、奈緒たちの家から響く笑い声を聞きながら、周りを見渡している。そして何かを見つけると、屈みこんでそれを拾った。

「エスパーカード、か」

男はそう呟くと同時に、その場から消え去った。

奈緒は一人で部屋に入ると、「よし」と一人、気合を入れた。そして自分の生徒手帳を取り出すと、一番後ろに挟んであるその二枚の黒いカードを取り出した。

一枚目のカードには奈緒の名前がある。だが、これが何のカード

なのか分からない。空白のかぎかつこの部分を透かしてみたが、やはり何も書かれていない。

奈緒は契約者の欄に何も書かれていない二枚目のカードを取り出した。

ふと、表面の右下に、『10/30』と書かれていることに気付いた。

「十月三十日？」

奈緒は一枚目の同じ場所を見た。そこには、『WC』とアルファベツトが二文字あった。

（何だろう。トイレ……って意味じゃないよね）

疑問に思いつつも、奈緒は二枚目のカードを手にとると、それを胸に当てて呟いた。

「ルミエルに告ぐ。我、新たな能力を授かるものなり」

一枚目の時と同様に、胸の奥がじんわりと温かくなる。

カードを確認すると、契約者名には『坂上奈緒』の名前が書かれている。さて、どうしよう。やり方が分からない。

とりあえず物の記憶を読むのだから何かで試してみようと、奈緒は辺りを見回した。

自然と窓際に置かれているこの部屋で一番大きな物体——ベッドが目につく。奈緒はその上にかけられている布団に手をかざすと、目をつむり念じてみた。

（見える、見える——）

奈緒は目を開けた。何も見えない。少し頬をふくらませ、今度は直接布団を触ってみる。そして同じように目をつむると念じる。

（見える、見える。見えてください——）

何も見えない。眉を顰めて目をつむったまま、奈緒は叫んだ。

「見えてるって言うてるでしょ！」

途端にそれは見えた。

ものすごい早さでフラッシュバックのように、目の裏に映像が映し出される。

運送会社の人だろうか、トラックの荷台に布団を積んでいる青い作業服を着た男性がいた。店の中で布団に触って、買うかどうか悩んでいる子連れの主婦が見える。お祖母ちゃんが、物干しに布団を干している姿があった。

はじき出されるように、奈緒はぱつと目を開く。何だか景色がちかちかしていた。ふらつきそのままベッドに倒れこんだ。荒く息をつきながら、奈緒は呟いた。

「……ホントに見えた」

奈緒はこの日、『サイコメトリー残留思念読取』の能力を得たのだった。

——またひとつ、時計の針が動いた音がした。

第一話「奈緒、能力に目覚める」了
第二話「記憶が消える」へ続く

第二話「記憶が消える」(1)

第二話「記憶が消える」

(1)

青空の中、奈緒は屋上で夕紀と裕子と三人でお弁当を食べていた。昨日のテレビの話題や最近流行りの靴の話など、他愛も無い話をし、てのんびりした時間を過ごしている。

時たま強い風に、髪の毛が口に入るのを鬱陶しく思いながらも、今日もご飯がおいしいなあと奈緒はご機嫌だった。

奈緒は食べ終わった所で、いつもは話の尽きない夕紀が、突然黙り込んでため息をついた。

「どうしたの。元気ない？」

裕子もうんうんと頷く。すると、夕紀は顔を下に向けたまま、上目使いで言った。

「……気付いてもうた。五時間目の授業、三田のアホやん」

アホかどうかは知らないが、三田とは奈緒らの数学を担当している三十代半ばの先生だ。一部の生徒からはかなり嫌われている。それというのも、授業中に設問を出し、答えの分からない生徒をその授業の間、立たせ続けるからだ。

数学の苦手な夕紀はもちろん、そのやり方には、奈緒も疑問を抱く時がある。

しかも、日によってかなりの気分のむらがあるのだ。そのまま座れる時もあれば、ねちねちと嫌味を言われ続ける時もある。

「あー、奈緒はいいよねえ。隣の席には、あんたの騎士^{ナイト}様がいるんだもん」

と、半目で奈緒を睨んでくる。その言葉に奈緒はぶんぶんと首を振った。

「ち、違うよ。あれはたまたま――」

夕紀がいつているのは、先週の数学の授業での顛末のことだった。その授業中、黒板に教科書の問いの説明を書いていた三田先生が突然

「坂上、この答えは！」

と奈緒のことを、チョークを持った手で指差した。

「はい！」

と勢いよく席を立ったものの、奈緒は頭が真っ白になっていた。

（い、今どこの部分？ 全然分らないんですけど……）

何故なら奈緒は、性懲^{しやうちやう}りも無く能力を使っていた幹雄との、今朝方のケンカを思い返して憤慨^{ふんがい}している最中だったからだ。

黒板と教科書とを行ったり来たりするも、やはりどこだか分らない。今日の三田先生の機嫌は、と見ると、眉間に皺しわがよっているのが、この席からも見える。最悪だ。ああ、このまま立たされてしまうのか、と諦めかけた時、ふいにトントンと音が聞こえた。

その音のする方をちらりと横目で見ると、その音は但馬修士が自分のノートを指で叩いている音だった。奈緒は再び目を教科書に戻してから、すばやくまたそのノートに目を移した。

そこには大きな文字で『x||8 , y||13 . 4』と書かれている。奈緒はままよと心の中で呟き、叫ぶように言った。

「x||8、y||13 . 4です！」

教室中が静けさに包まれている。奈緒の背中につーっと汗が流れた。

そして、三田先生の不機嫌な声が響いた。

「……正解だ。座れ」

奈緒は脱力しながら、椅子に座った。左を見ると、但馬は何も無かったかのように、少し俯うつむき加減で教科書を捲うっていた。

その授業が終わったあと、奈緒は机に腕を組んで乗せ、すでに寝る体制に入っている但馬に

「さつきはありがとう」

とお礼を言ったが、彼は「ああ」とただ一言いっただけで、そのま

ま頭を机につつぶして寝てしまった。

その様子を裕子が目撃していて、夕紀に話したことにより、彼女の頭の中で壮大な物語が展開された。

「それは恋や。恋の予感やで！」

どうにもこうにも夕紀の頭の中は常に乙女だ。何かというと、愛だ、恋だと騒ぎ出す。中学時代、パンを口にくわえて登校した事もあるらしい。誰にもぶつからずにそのパンを食べきって、学校にたどり着いてしまったそうだが。

今日もその授業の事を持ち出して、付き合っちゃえ、という夕紀の言葉に、奈緒が顔を顰めると、奈緒のわき腹を肘でつつくふりをしながら彼女は言う。

「えーやんか。但馬って背え高いし？ この間の持久走、陸上部の連中抜かしたら一位のタイムやったし？ 剣道部なんやる？ えーやん。なんか真面目っぽいし、暗い感じるけど。あんましゃべらんし、おもろなさそやけど。韓流はんりゅうみたいな顔してるやん。ちょっと目つき鋭すぎる気もするけど」

夕紀の言葉は褒めているのか貶けなしているのか、いまいちよく分からない。私のタイプはやっぱり王子様系やなあと続けている。

「うちのガッコで、王子いうたら、やっぱり市原くんやね」

その言葉に奈緒は、少し離れた場所で楽しそうに話している目立つ集団を見る。その中で中心にいる人物が何事か話すと、周りの男子がどっと沸いた声を出している。

彼はこの辺りではちよつとした有名人だ。中学時代にバスケットで活躍して、その年のMVPを取ったのだという。何度かスポーツ雑誌の表紙を飾ったらしい。まったくのスポーツ音痴の奈緒はその事実を知らなかったが、すでに校内ではファンクラブも発足されているということだ。

なるほど、市原裕真いちはら ゆうまは王子様である。誰に対しても明るいいし、男子にも女子にも優しい。クラスの中でも常に目立つ存在である。そして年頃の乙女にとって一番重要な、ルックスが抜群に良い。少し茶色い長めの髪の毛はサラサラと風に靡いているし、笑った顔は甘い雰囲気だ。

屋上にいる女子の何人かが、彼をちらちら見では、頬を赤く染めている。

「なあってバスケット辞めちゃったんだろ」

夕紀がこの世の終わりだというように嘆く。

「プレイしてるとこ見たかったのになあ」

と三田先生の事はすでに彼女の頭には無い様子で、空を仰ぎ見ている。

しかし予鈴の鐘になった事で、再び思い出した夕紀は座ったまま、

行きたくないとこねだす。奈緒と裕子が二人がかりで、それぞれの手を引っ張り上げ、なんとか夕紀を立ち上げさせた。

そのまま彼女を引き摺るようにして、教室に戻っている途中、廊下の向こうに但馬の姿が見えた。隣には、長い髪的女子生徒がいた。

何やら会話をしているのを見て、奈緒は驚いた。何故なら、四月も終わりに近づこうとしている今日まで、奈緒は但馬と会話らしい会話をした記憶がないからだ。挨拶の他は、常に「ああ」とか「わかった」とか、一言で終わってしまう。

そんな但馬とその女子は、普通に会話をしているように見えた。その女の子は笑顔で軽く手を振ると、隣のD組の教室に入っていた。

ぽんぽんと軽く肩を叩かれる。振り返ると、裕子が奈緒の耳元で囁いた。

「大丈夫だよ。あの子は、但馬くんの幼馴染おさななじみ」

何が大丈夫なのか。奈緒は「ふーん」と言うと、教室に入った。裕子も夕紀と同じで、どうにも恋愛話コイバナをしたいらしい。

今日の三田先生は妙に機嫌が良かった。口の端が常に楽しそうに上がっていた。これなら、今日は誰も被害に遭あうことはなさそうだ。

うららかな春の風が教室内に吹きこむ。

「さて、P22の問1を……市原。それから問2を川島。黒板に書け」

三田先生にそう言われて立ち上がった二人は、椅子から立ち上がるとノートを手に前に出た。奈緒はほっと息をついた。一応問題は解いているが、自信は無かったし、黒板にチョークで字を書くのは、緊張するので出来れば遠慮したい。

ほどなくして、二人は黒板に問題と解答を書き終えた。そこで三田先生は、市原の書いた解答を見て、

「はい、正解」

と大きく赤いチョークで丸をした。それから、川島の書いた解答に

「不正解」

と大きくバツを書いた。

「答えは $a = 2\sqrt{5}$ だ。式は合ってたんだがな。ここで計算間違いつてる」

と、川島の書いた式の途中に正しい値を書いた。

「さて、と」

と三田先生は手についたチョークの粉を軽く払うと、川島の席に近

づいていった。そして、「じゃあ、お前、罰な」

と川島に向かって言うと、きょとんとした目で見上げている川島の顔を思いつきり――殴った。

側にいた女子の短い叫び声と共に、川島の身体が椅子から転げ落ちる。

時間が止まったかのように、クラスの中が静まり返った。それから川島の「痛え」と呻いている声が聞こえる。そして、徐々に時間を取り戻したクラスメイトたちが、ざわめき始めた。

「三田先生、何やってるんすか！」

その中で大きな声を上げて立ち上がったのは、市原だった。すると三田先生は、

「なんだあ、市原。文句あるのか？」

とにやにや笑いながら、市原に近づいていった。それを市原は睨んだま、

「おおありです」

と言った。三田先生は、

「何だ、言ってみろ」

と市原の前に立つ。そして、彼が何か言おうと口を開いた途端、三田先生はまたしても、彼の腹を殴った。廊下側の壁に市原の身体が

ぶつかり、ドンッと大きな音が響いた。今度はクラスの皆が大声で騒ぎ出す。

すると、三田先生は教壇に戻ながら、手を数回、ぱんぱんと大きく鳴らした。

「はいはいはい。お前ら、静かにしろ！」

それから、皆の前に向き直ると、決して大きな声ではないその声が教室の中に響いた。

「はい、忘れる」

ただそれだけ言つと、三田先生は背を向けて黒板の文字を消していく。

皆の動きが一瞬止まった。奈緒は、教室の中の空気が変わったのを感じた。皆が静かになつてゐる。見ると、市原と川島が、不思議そうな顔をしながら、椅子に座りなおしていた。川島が左頬をさすつてゐるのが見えた。そのまま授業は再開され、授業は普通にチャイムと共に終わった。

奈緒は三田先生が教室を出て行つたのを見届けると、前の席の夕紀の背中を叩いた。

「ん〜？」

と両手を挙げて伸びをしていた夕紀は、上半身だけこちらに振り向いた。

「ねえ、さっきの何だったの？」

奈緒が声をひそめて聞くと、夕紀は

「なにが？」

と首を傾げた。

「三田先生が市原くんたち、殴ったよね？」

夕紀はそんな奈緒の言葉に

「は？ いつ？」

と聞いてくる。

「今だよ、今。ね？ 市原くんたち殴られたよね？」

と右側の裕子にも言う。裕子は帰り支度をしながら、

「奈緒、夢でも見てたんじゃないの」

と興味なさそうな顔でいう。

よし、じゃあ本人に聞いてみよう、と突然瞳をきらめかせた夕紀

は、「は？」とうろたえる奈緒の腕をひっぱりながら、すでに人の輪が出来ている中心に声をかけた。

「ねえ、市原くん！」

呼ばれた当人は、

「ん？」

と椅子の背もたれに左側にして座り、机に右肘をついたまま、夕紀の方を見上げた。夕紀は

「三田に殴られたことある？」

と押しのけられた女子の視線を気にせず言い切ると、市原は笑って答えた。

「いや、まだないなあ。なんで？」

「いやいや、この子が見たっていうから」

と夕紀は言いながら、奈緒の身体を輪の中に引きずり込んだ。奈緒は引き攣った笑いを見せながら、

「本当に、本当？ 殴られなかった？」

と聞いた。不思議そうな顔で、うんうんと頷く市原に奈緒は更に尋ねた。

「……お腹の辺り、痛くない？」

すると市原は目を丸くして

「うん、なんだかさつきから腹、ずきずきしてんだよね」

とお腹を触ると、その刺激が痛かったようで、眉を顰める。そしておもむろにワイシャツを裾からたくし上げて腹をみせた。途端に押さえ切れなかった女子の黄色い悲鳴が聞こえる。

そんな心情ではない奈緒は、市原の腹の赤みを見て

「保健室、行っておいたほうがいいよ」

と眉をしかめて言った。彼の腹筋辺りの皮膚が、赤黒く変色していた。市原はお腹を軽く指で確かめるように押しながら、

「うん、そうする。ありがとう」

と笑顔を返した。それから奈緒は振り返ると、川島にも声をかける。

「川島くんも」

突然呼びかけられた川島は、驚いた顔をして奈緒を見た。

「左の頬、腫^はれてる」

そういわれて川島は

「やっぱり？　なんかおかしいな思ってたんや。歯が痛み出したん
と思ってたわ」

と納得した顔で言った。

第二話「記憶が消える」(2)

(2)

「なにになに、どーゆこと？」

と、夕紀は席についた奈緒に詰め寄った。

「それはこっちが聞きたい。何で何も覚えてないの？ どーゆこと？」

逆に問い返した奈緒は、夕紀と一緒になって首を傾げた。

すると隣の席の裕子が、はきはきとした口調で言った。

「はい、まとめます」

奈緒と夕紀は、裕子のその言葉に顔をげんなりとさせた。彼女は論証検分が大好きで、時折こうしてそれは突然始まる。そんな二人の友人の様子を気にもせず彼女はノートを広げると、さらさらと書き出す。

仮説1、三田先生が殴った事実は存在しない。

1・奈緒が嘘をついている。

2・奈緒が夢をみた。

仮説2、三田先生が殴った事実は存在する。

1・クラス全員が嘘をついている。

2・クラス全員がその事実を忘れた。

そこまで書くと裕子はペンの動きを止め、

「他に何か思いつく？」

と聞いてきた。ぶんぶんと首を振る二人に、裕子は「そう」と一言いうと、さらに書き足していく。

裕子は奈緒を見て聞いた。

「嘘は？」

「ついてません」

うんと頷くと、裕子は仮説1の1の上に横線を引いて消した。そして、仮説2の1も同様に消す。そして、『誰も嘘はついていないことを前提とする』と裕子の手によって、その文字が楽しげに書かれていく。

『仮説1の場合』

疑問点：市原ちゃんと川島さんに殴られた痕があるのは？ 奈緒はその箇所を言い当てたのはなぜか？

『仮説2の場合』

疑問点：全員が忘れたとするのなら、それはどうやって？ 集団催眠？

じつと、自分の書いた文章を睨んでいた裕子はふうとため息をついた。そして目だけを上に向けると

「1の2が一番論理的ね」

と言った。奈緒は裕子の書いた1の2の内容を見た。

『奈緒が夢を見た』
それに対して奈緒は

「えー」

と非難の声を上げる。そして

「ほら、疑問点は、疑問点はどう説明するの？」

と人差し指でその『殴られた痕』の箇所を指し示す。

「そうね、偶然？」

裕子はあるさりと言い切る。んなアホな。がつくりと肩を落とした奈緒に裕子は強い口調で言った。

「じゃあ、仮説2の疑問点。奈緒は説明できるの！？」

なんだか怒らせてしまったようだ。途端に奈緒はおよび腰になった。

「……ごめんなさい。夢を見ていたようです」

あっさり引き下がった奈緒に、裕子は

「じゃ、そういう事で。これにて終了」

と『奈緒が夢をみた』にぐるぐると丸を書いたあと、ノートをはたと閉じた。

その表紙には『検証ノート』と書かれていた。恐ろしいことにナ

ンバリングが4号と打ってある。すでに3冊の検証ノートが存在するらしい。彼女曰く、小学生の頃から始めていたという。

ホームルームが終わり、掃除当番でもない奈緒は

「それじゃ、また明日」

と帰り際の挨拶を交わしながら、先程の事を考えていた。

裕子の検証で気付いたことがある。全員が忘れる方法。

もしかしたら、と奈緒は自分の胸ポケットに入っている生徒手帳を取り出した。これなら、あり得るかもしれない。超能力カードに、^{エスパー}もしも人の記憶を操作するような能力があつたのなら……。

そこまで考えると奈緒はいてもたってもいらなくなった。もしも三田先生がそんな能力を持っていたのなら、今日みたいなことは繰り返し行われるかもしれないのだ。いや、奈緒が知らないだけで、すでに何度も行われているのかもしれない。

何故なら、その出来事を忘れてしまっているかもしれないから。と、そこまで考えて首を傾げた。どうして私だけ忘れていないのだろうか。奈緒は首を振った。分からないことは後回しだ。まずは、三田先生が本当にカードを所持しているのか、それを調べなくては。

三田先生が担当しているクラスは一年生のA～C組と二年生のク

ラスだ。さすがに上級生のクラスは入りづらいので、奈緒はさし当たって、比較的簡単な隣のB組の教室を覗いた。掃除をしている。当たり前だ。奈緒のクラスも掃除をしている。

少しの間、時間をつぶそうと奈緒は廊下の窓からその景色を眺めた。1年から3年までの教室が入った新校舎の廊下の下には校庭裏がある。目の前には3つのバスケットコート、その左手に体育倉庫、右手には部室棟が見える。すでにバスケット部の人たちが、青空下のコート内でストレッチを開始していた。三階から眺める景色は、その人たちを小さなものとして捉えている。

さきほどから風が強くなり、敷地脇に並んでいる樹木の葉がザワザワと音を立てていた。

奈緒は肩まである髪を軽くまとめると、左側に寄せて片手で押さえた。さらに強風が吹き、思わず目をつむる。下からも、砂が目に入ったのか、うわあと叫んでいる声が聞こえた。

「ずいぶん風、強くなったなあ」

いつの間にか、奈緒の隣に並んで窓枠に手をかけていた男子がそう言った。ちらりとそちらを見ると、奈緒の知らない人だった。独り言かと思い、また眼下に目をやると、

「そう思わん？」

と奈緒に話しかけてきた。独り言ではなかったらしい。奈緒は

「そつだね、強くなったね」

と答えながら、その人物を見た。

詰襟の学生服のボタンをすべて外して、白いワイシャツが見える。そのワイシャツのボタンも数箇所開けられて、中からVネックの赤いシャツが覗いていた。耳には左側だけに3個のピアスがつけられている。極めつけは髪の色とその形だ。その髪の色は、シャツと同じ赤い色をしていた。そして左右の髪の長さが極端に違う。右はあごまであるのに、左は短髪である。

固まった表情の奈緒を見て、その男子生徒は首を傾げた。それから奈緒の視線の先にある自分の髪を見上げながら言った。

「ああ、やっぱ、これすごいなあ。俺も鏡見たとき、声が出なかったわ。言つとくけど、俺の趣味じゃないからな。兄貴が美容師でさ……」

なんか色々実験台にされるんだ、といいながら彼は自分の右側にある長い前髪を引っ張っている。そこへ、彼の友達だろう男子生徒数人が教室から出てきて、その一人が声をかけてきた。

「うおーい、雅樹！ 帰んぞー！」

それに軽く手を上げながら彼は答えた。

「今行くわ！」

そして、奈緒に向き直り、

「俺、B組の渡部雅樹^{わたへ まさき}。あんたは？」

と尋ねてきた。

「C組の坂上奈緒です」

「そうか、奈緒か。ほんじゃ、またな！」

と言つて彼は廊下を走つていった。

雅樹の後ろ姿を見送りながら、奈緒は随分とフレンドリーな子だなあと考えていた。

掃除が終わつたB組の中を覗いてみると、中には数人の生徒が残つていたが、特別に奈緒に対して注意を払うものはいない。それを確かめたあと、奈緒は教壇に立つと、それに両手をついた。目をつむり念じながら、呟いた。

「……見えてください」

なぜだか、丁寧に頼まないと奈緒はこの能力をうまく使えない。口に出さなければこの能力は発動しないが、どんなに小声でもそれは大丈夫だ。能力を手に入れてから、色々試した結果だった。

奈緒の脳裏に様々な映像が流れ込んできたが、しばらくして奈緒は閉じていた目を開いた。くらくらしながらも振り返り、黒板の横に貼り出されている時間割表を見る。今日、B組は数学の授業がなかった。がっくりと肩を落とす。先に確かめればよかった。

そんな様子の奈緒を、残っていた生徒が不審げな目を向けていたが、奈緒はそれには気付かず、A組の教室へと向かうことにした。

A組の教室には誰もいなかった。奈緒はほっとしながら、堂々と教室に入る。そして今度は時間割を確認する。三時間目に数学の授業があった。

教壇に手について奈緒が念じると、午前中の授業の風景が流れてきた。三田先生が教鞭をふるっている。そして、答えられなかった生徒を、やはり殴っていた。三田先生の表情は、とても楽しそうだ。

奈緒は現実に戻ってくると、疲れた頭を押さえた。やはり、先程の事は夢などではない。しかしこれでは三田先生が超能力を使っているのかが分からない。他の場所も調べてみなければならぬだろう。ため息をついた奈緒に、

「あれ、坂上？」

と声がかかる。廊下を見ると担任の水谷先生だった。

「なんだ、お前まだ残ってたのか？ 部活は？」

「……帰宅部です」

その答えを聞き、途端に嬉しそうな表情を見せた先生に、奈緒はなんだか嫌な予感がした。

「それでは、失礼します」

と先生の横を通りすぎようとしたが、水谷先生は奈緒の肩を丸めた

プリントで軽く叩いた。

「ようし、お前、暇か？　暇だな？」

そう言つと、

「暇じゃないです」

という奈緒の言葉を華麗に流して、奈緒を職員室へと腕を掴み、連れていった。

「いやあ、先生忙しくてな。これ、頼むわ」

と奈緒に手にしていたプリントを手渡す。5月にある球技大会の概要が書かれている。

「それ1枚につき、学年分の250枚コピーして、ホッチキスで番号順に止めてくれな。隣の会議室使つていいから。終わったら、先生の机に置いといたらいいわ」

全部で4枚ある。4枚綴りの冊子を250部作らないといけないらしい。奈緒は気が遠くなつた。

「せ、先生……ヘルプは」

「あ？　まあ、誰かいたら声かけとくから、よろしくな」

とすでに他人事たじんじになつた様子の水谷先生は、手を振りながら職員室を出ていった。

奈緒を見知っている何人かの先生が同情的な目を向けたが、奈緒と目が合うと「頑張つて」とか「運が悪かったなあ」と言うだけで、手伝ってくれる気はさらさらないらしい。奈緒はどんよりと黒い雲を回りに集めながら、職員室の角にあるコピー機へと向かった。

最新式のコピー機ならば、勝手にホツチキスで閉じてくれるものがある。しかし、この職員室にあるコピー機は……。ウィーンガシヤンと繰り返すその音を聞きながら、船を漕いでしまうほど、印字速度が遅かった。しかも途中で止まった。何だ何だと見てみると、給紙のランプが付いている。紙切れのようだ。

隣に積んであるA4用紙を下の台にセットする。ガンと蓋を閉めると、再びウィーンガシヤンという音が聞こえ出した。左側の排紙の場所がそろそろいっぱいになったので、それを隣の会議室に持つていく。という作業を繰り返しながら、奈緒は考えた。

（なぜこうなった。今日の占い、おおハズレ）

と今朝見た、朝の番組のおはよす占いの『うお座のあなた。今日は絶好調です。何をやってもうまくいきます。苦手な事に挑戦してみては？ ラッキーアイテムは昨日作ったカレーです』という、おはよすキャスターのお姉さんの言葉を思い返していた。昨日カレーを作っていなかったのがいけなかったのだろうか。

会議室の扉を開け、職員室に舞い戻ると、視界の先に三田先生の姿があった。机の引き出しから何かを取り出すと、再び職員室を出ていった。

その様子を眺めながら、奈緒は思いついた。三田先生の机を残留サイ思念読取してみよう、と。

さりげない振りを装い、三田先生の机に近づくと、奈緒はその机に触れた。

第二話「記憶が消える」(3)

(3)

テーブルの上に並べられた4つの山になった紙の束を、端から順にとつていく。それを一気に半分に折りたたむ。そして、その4枚を順番に並べ揃えてから、ガシャンガシャンと左端部分に二箇所ホッチキスで止める。永遠に続くような作業を繰り返しながら、奈緒は先程見えた映像を思い返していた。

授業が終わったばかりなのか、疲れた様子の三田先生は、教材を机の上に乗せると、机に座って黒いカードを取り出すと眺めていた。どこか満足げな表情をして。誰かに呼ばれて返事をしながら、三田先生は財布の中にそれを入れていた。

何の能力なのかは判別できなかったが、あれは確かにエスパーカードだ。三田先生は何かしらの能力を持っていることは確かだった。

目的の場所は分かった。財布だ。しかし、どうすれば三田先生の財布を手に入れられるのだろうか。まだ半分も終わっていない紙の山を前に、「んぬう」と奈緒は腕組みをして唸った。その時、会議室と職員室との間のドアが音を立てて開いた。

「あれえ、全然終わってないじゃないか。ほら、手え動かせ、手を」と言いながら水谷先生が入ってくる。

「助っ人、連れてきたぞお」

と得意顔でいった水谷先生は、後ろにいる相手を前に押しやった。

それは、ひどく不機嫌な顔をした但馬だった。部活を終えたばかりなのか、Ｔシャツにジャージを着ている彼は、頭にタオルをかぶせたままだった。髪の毛が汗で濡れている。

「そんじゃ、先生また指導戻るから、あとよろしくなあ」

と、嵐のように先生は去っていった。残された但馬は奈緒に、

「何やんの？」

と眉を寄せたまま、低い声で聞く。

奈緒は恐る恐る、一連の手順を但馬に説明した。

その後しばらく黙々と作業をしていたが、奈緒は沈黙に耐えられずに口を開いた。

「えっと、部活終わったの？」

但馬は「いや」と首を振る。

「走りこみ終わって、打ち込みってところで、水谷に連れ出された」

なるほど、彼の不機嫌な理由が分かったような気がした。そうなんだ、と奈緒は曖昧に返事をした。

水谷先生は剣道部の顧問をしている。顧問の権力を行使され、無理やり連れ出されたい。彼も奈緒と同じく、今日は不運なめぐり合わせのようだ。

さらに会話を続ける程、奈緒は剣道に詳しくない。再び、沈黙が訪れる。紙を擦^する音とホツチキスの針をとめる音だけが会議室に響く。

しばらくして冷えてきたのか、但馬は腰に巻いていたジャージの上を羽織り、チャックを閉めた。そして、ふと思い出したように彼は言った。

「今日の事なんだけど」

奈緒は彼のその言葉に首を傾げた。

「今日？」

「ああ、三田が殴ったとか何とかいう話」

奈緒は思わず手を止めて、但馬の事を凝視した。窓の外から夕暮れの紅光が会議室の中を照らしている。奈緒の視線から目を外して、但馬は作業を開始しながら言った。

「あの授業中、一瞬、変な感じがした時があった」

そして、彼は何かを思い出すように一点を見つめている。

「なんだか、ぼんやりした感じ」

その様子に奈緒は思い切って聞いてみた。

「あのさ、笑わないで聞いてくれる？」

但馬は「ん？」と顔をあげた。

「超能力って信じる？」

その言葉に、但馬は動きを止めた。そして、奈緒の顔をその鋭い視線が捉えた。何かを探るような目つきで、彼は見ている。その視線に耐え切れずに奈緒は慌てて言った。

「いや、あのね、例えば、例えばだよ。三田先生が不思議な力を使っていた、とか考えられない？」

奈緒はさらに続ける。

「例えば、持つてるだけでその力使えちゃう、みたいな」

「……どんな物？」

「あー、なんだろう。お守りみたいなの？」

奈緒は、ずばり拾った黒いカードで、など言えなかった。それに対して、但馬はうーんと考えて言う。

「……お守りね。……代々伝えられたもの？」

「うん。そんな感じでもいいかも」

「でも？」

「いや、そんな感じで」

眉を寄せてなにやら考え込んでいる但馬に向かって、奈緒は意外に思ってた。呟いた。

「但馬くんが、こんな話に乗ってくるとは思わなかったよ」

その小さな眩きを但馬は拾い、作業を再開させた手を再び止める。
奈緒はそれに気付き、ホツチキスを止めながら言った。

「ほら、普通こういう話って、ひいたりしない？」

「ああ……一応、神社の息子だからかな。……この辺、不思議な話は結構ごろごろ転がってるし。そういった話は嫌いじゃない。それに……」

突然、口を閉ざした彼は、

「いや、なんでもない」

と頭を振ると、奈緒に向き直った。

「で、三田がそれを持ってるって、お前は言いたいんだな」

「うん。……財布の中とか……あ。多分、多分だけだね」

とばたばた手を振る奈緒に、但馬は頷く。

「そうだな。もし、そんな物があるとしたら、大事なもんだろうな。財布とかキーケースなんかと一緒に持っているだろうな」

「うん！ だからどうしたら三田先生の財布を、手に入れられるかってことが問題なんだけど……」

身を乗り出して勢い込んだ奈緒に、但馬はふう、とため息をひとつ付いた。

「……それ、犯罪だろ。本気で考えんなよ。」

と手元のプリントを折りながら、

「あくまでも、仮定の話なんだから。……お前、本当に確かめるなよ」

と但馬は最後、奈緒を横目で見ながら、釘をさすように言った。

奈緒は一瞬固まってから、「もちろんだよ」とごまかし笑いを返した。彼は単にこの場の暇つぶしの会話、それだけの認識だったようだ。そうだ。信じるはずがないじゃないか。奈緒だって、自分が『サイコメトリ残留思念読取』の能力を持つ前だったなら、こんな馬鹿な話を信じなかっただろう。それなのに奈緒は、但馬に裏切られたような、そんな悲しい気分になって、勝手に落ち込んだ。意外と話しやすいが、但馬に奈緒は、勝手に舞い上がっていたようだ。

突然黙り込んでしまった奈緒に、但馬は少し口調を緩めて、

「別に、お前の話を全部信じてないって訳じゃないから」

と何だか慰めるように言う。なんだか泣きたくなった。情けない。同級生に気を使われてしまった。

どうにかこうにか冊子を作り終えた時には、外は真っ暗だった。

「よしよしご苦労さん」

机の上に高く積まれた冊子を見ながら、満足そうな顔で奈緒たちに、

軽い口調で^{うまい}労いの言葉をかけた水谷先生は、

「但馬。坂上のこと送ってやれ。どうせ、お隣さんだろ」

と衝撃の言葉を言った。

（お隣さん？ いまだどこにあるのか分からないお隣さん？）

首を傾げた奈緒に先生は言った。

「なんだ、お前知らなかったのか？ 但馬は永谷神社の子だぞ」

神社。あった。確かにある。赤い鳥居さん。でもそれはお祖母ちゃん家から1キロ程離れた場所にあるわけで……。ああ、そうか。奈緒は気付いた。

「その間には、一軒も家がないのね……」

どんだけ、お祖母ちゃん家は山奥なのだろう。お隣さんにちょっと醤油を借りになんて夢物語ではないか。

「隣っていつでも……まあ、いいや。俺、自転車だけど、お前は？」

「あ、私も自転車」

「そつか。じゃあ俺、着替えてくるから。下駄箱で待ってて」

とジャージ姿の但馬は職員室を出て行った。

丁度、部活の終わった連中と重なり、下駄箱は靴を履き替えるのにこったがえしている。奈緒はそこでしばらく待っていた。するとそこに

「あら、奈緒？」

と声がかかる。見ると、裕子がいた。少し疲れた顔をしている。

「部活、新聞部だね。こんなに遅くまでやるの？」

と奈緒が尋ねると、裕子は、

「今日は特別。藤堂先輩がひとり熱く語り始めて、企画会議が延びちゃってね。いつもはもう少し早いよ」

三年生の貫地谷先輩かんじやは新聞部の部長を務めている。噂に疎い奈緒うそでも、彼の奇行は聞き及んでいた。

すでに伝説となった逸話には、校長先生のカツラ疑惑を調べるため、全校朝礼の中、校長先生の後ろから、釣竿につけた鳥もちを頭に向かって投げつけたという。結果は、青空に黒い塊が舞い、校長先生の頭は、朝日にあたり、後光がさしたかのようだったとか。夜中に音楽室のピアノがひとりでに鳴るといふ噂を聞きつけ、ピアノを分解してしまったとか。一番の加齢臭の持ち主を調べるために全校生徒の靴をすべて調べあげたとか。

一旦気になりだすと、どうにも止まらない性格のようだ。

「まあ、私にも要因があつた訳だけど。奈緒にもね」

そういつて、何故か奈緒を睨む。奈緒はきょとんと数回瞬きをした。

「私？」

「そう、実は……あら？」

裕子が奈緒の後ろを見て、会話を中断させる。奈緒がその視線の先を振り返ると、帰り支度の終えた但馬がいた。奈緒は裕子に、但馬と一緒に帰ることになった事を簡潔に説明した。すると裕子は途端に、

「オーケ、オーケー。了解しました」

と言うと奈緒に向かって、にやりと笑みを浮かべた。

「いやあ、青春だねえ」

奈緒は途端に真っ赤になって言った。

「だから、そんなんじゃないかって、遅くなったから！」

「いいっていいって。そんじゃね。お邪魔虫は退散致しますわ」

と裕子は手をひらひらと振り、帰っていった。

あれは、確実に夕紀に伝える気満々だ。奈緒は明日の夕紀の様子を想像すると、頭が痛くなった。

気まずさ100%の奈緒に気にする風でもなく、但馬は「いくぞ」と一声かけるとすたすたと駐輪場へ向かった。慌ててそれに奈緒はついていった。まばらに残った自転車の中、奈緒は自分の自転車の

鍵を外すと、すでに門で自転車にまたがり、振り返って待っている
但馬の所まで慌てて押していく。かなりマイペースな人だと思う。

家の前まで着くと、奈緒は但馬にお礼を言った。それに対して但
馬は軽く頷くと

「じゃあ」

と言って、さらに先の道へと自転車を向ける。奈緒が

「どこ行くの？」

と聞くと、

「家、帰るんだけど」

と当然のように言った。

「でも、神社はあっちだよ」

と元の道をさした奈緒に、但馬は呆れた顔を返した。

「俺に自転車いすで階段を登れというのか、お前は」

但馬がいうには、この先の道が神社の裏に続いているのだという。
そつえば、この先には行ったことがない。軽く道の向こうを見る

と、50メートル先に民家の明かりらしきものが見えた。

「うちは敷地が隣ってだけで厳密にいえば、お隣さんってやつは、あそこだろう」

但馬の家はさらに先にあるのだそうだ。

なるほど、あの距離ならば、お味噌をもらいにいけるなあと奈緒が考えながら、但馬が自転車に乗って去っていく姿を目で追っていた。それはここまで奈緒と走っていた時より、幾分か早く、そうか、私の速度に合わせてくれていたんだと、奈緒はその時になって初めて気が付いた。

マイペースなのか、気の利く人なのか、どっちなのだろう。つかみどころのない人だ。但馬くんはA B型かな、と思いながら、奈緒は家の中に入っていた。

夕ごはんを食べながら、奈緒はお祖母ちゃんに、お隣さんが神社の子で、同級生だったよ。というと、

「あらあ、神社の子いうたら修ちゃんだねえ。もうそんな年かい。おんなじ学校だったか」

と言った。それから

「昔は、奈緒もようけ一緒に遊んでたろ。覚えとらんけ？」

と言う。一緒に遊んだ？

奈緒は昔のことを思い出そうとした。確かに何人かと一緒に遊んだ記憶はある。だけど、そこに但馬がいたかどうかは、さっぱりだった。あんな目つきの鋭い子がいたら覚えていると思うのだが。但馬も特に奈緒にそのような事を言った覚えはない。彼も忘れているだろう。

「覚えてないなあ」

という奈緒にお祖母ちゃんは

「まあ、小さかったからねえ。あんたたち」

と懐かしそうに目を細めている。そして、ふと箸の手を止めて言った。

「そうだ。アルバムがあつたわ。確か……どこ仕舞ったっけねえ」

としばらく考えていたが、首を傾げた。

「まあ、時間あつたら探しとくけん」

その言葉に奈緒は、期待薄だと思ったが、とりあえず頷いておいた。

第二話「記憶が消える」(4)

(4)

次の日登校すると、案の定、夕紀に捕まった。朝のホームルームがもうすぐ始まるというのに、奈緒は裕子とともに階段の踊り場まで連れてこられた。

奈緒の説明を聞いて、夕紀は「なーんだ」とがつくり肩を下げる。

夕紀には悪いが、奈緒の頭の中はそれどころではない。奈緒は三田先生の財布をいかにして手に入れるか、そればかりを考えていた。今日は三田先生の授業はない。

すでに立ち直っていた夕紀が、

「花の命は短し。枯れてしぼむ前に、恋せよ乙女いうやんか」

と自分の恋愛論を語っていた。それに対して、裕子が何やら手帳を取り出す。

「統計によると、1年の夏休みまでに交際に発展する男女の割合は、約三割。そのうち、四月中の割合はさらに約三割にあたるわ。全体の割合数に直すと9%。つまり、うちの組は36人だから」

裕子は手帳の裏についている電卓で計算を始める。

「3・24……3人ないし4人が四月中に交際をスタートさせる。
現在、我が組の中で交際をしている人数は9名。その内、中学時

代からの交際がある人を除外すると、3名になるわ。……奈緒たちが付き合えば、平均値を超えて、C組がトップに躍り出るんだけど」

奈緒と夕紀は裕子をまじまじと見つめる。奈緒が

「どうしてそんな事知ってるの？ 調べたの？」

と聞くと、裕子は当然という顔をして頷く。いつの間に。

「部活動の一環よ。ソースは足で集めなきゃ」

綺麗な顔に微笑が浮かんだ。恐ろしい。たまらず夕紀が口を開く。

「……ちなみに、うちのクラス、誰が付き合い出したの？」

「香川さんが、入学してすぐに二年生の先輩に告白されて。先週、目黒さんと志村くんが付き合いだしたわ」

それを聞いて夕紀は

「うえ〜！ めぐつちと志村くん、付き合ってたの!？」

と声をあげた。奈緒も驚いた。そう言われてみれば、最近二人は、やけに一緒にいる姿を見るような気がする。

「市原くんは!？」

奈緒が考えている最中、夕紀は裕子に詰め寄っていた。

「彼はフリーね」

あきらかにほつとした夕紀の前で裕子は続ける。

「優良物件だけど、彼、恋愛とかに興味ないみたい。ちなみに高校に入学してからのラブレターの数に2枚。直接告白された回数は8回ね。ほとんどが上級生からみたいけど。メールのラブレター件数はさすがに分らないわ」

と悔しそうな顔をしている裕子を半目で見ながら、奈緒は考えた。一週間に二度告白される……。うーむ。大変だ。

「だれか、プログラミングが得意な人いないかしら……」

となにやら物騒なことを企んでいる裕子は、ふと奈緒を見てにやりと笑って言った。

「ちなみに但馬くんは、2回されてるわよ。告白」

奈緒はむっとした顔をして、だからなんなんだ、と思った。

体育の授業は、C組とD組の二クラスが合同で行われる。今の時間は、来月に行われる球技大会の練習を兼ねて、体育館を半面に分け、バスケの試合とバレーボールの練習が行われていた。

そんな中、女子の熱い視線が送られているのは、やはり市原だった。相手のブロックをするりと避け、単身ですべるようにシュートを決めている。ゴールした時は、まるで空中に浮いているように見

える。滞空時間が長いせいだ。彼の表情もいきいきと輝いていて、まさに水を得た魚のようである。

そんな試合の中、市原のボールをカットした人物がいた。但馬だった。奈緒は驚いた。周りも驚いた。市原も驚いたようで、そのまま鮮やかにシュートを決めた但馬に、笑顔で何やら声をかけ、背中を叩いている。

但馬の周りがきらきらして見えた奈緒は、目をぱちぱちと瞬^{しんぱち}いた。

「奈緒！」

突然の叫び声に、奈緒は驚いて思考を途切れさせた。次の瞬間、奈緒の顔面にバレーボールの玉がぶち当たった。

保健室の先生は20代後半のとても美人な先生だ。その名を美智子先生。通称みっちゃんと呼ばれている。黒の縁取り眼鏡をかけており、それがまた彼女をセクシーに見せている。一つに纏めた黒い髪も、少し落ちたおくれ毛が、さらに彼女の淫猥さを引き立たせていた。

男子生徒に絶大な人気を誇っている。しかし、また女子にも人気だった。なぜならば――。

「はい、おしまい！」

奈緒の鼻に絆創膏を貼ったあと、最後のしめとばかりべしつと音をたてて奈緒の額を叩く。

「痛っ！」

たまらず、声を上げた奈緒を気にもせず、丸椅子を回転させて、美智子先生はカルテに何やら書き込んでいる。

「バレーボールの授業中に、ぼーっとしてる奴がある？ 一体何に気をとられてたやら」

と、にやりと口の端を上げる。

「うう」

叩かれた額を押さえながら、奈緒は呻いた。

「担がれてやってきたから、何かと思えば……最近、怪我人が多いから、驚いたでしょうが」

それは、奈緒のせいではない。夕紀がぎゃあぎゃあ騒いだため、女子数人により、胴上げするように運んできたせいだ。

奈緒は先生の言葉に反応した。

「怪我人が多い？」

「そうなのよね。この一週間、何やら打撲した生徒が多くって、忙

しいったら。おととい救急車で運ばれた生徒もいるのよ。レントゲンで調べたら、肋骨折れてたつて。それも本人、いつ折ったか分からないつていうし……。まあ、あばらの骨なんて、年寄りだと、くしゃみひとつで折れるけど、まだあんたたち若いでしょう？　ちょっと不思議よねえ」

「あ、あの、それ。その負傷した生徒たちの運ばれてきた時間とかつて分かりますか？」

「ん？　分かるわよお、ほら」

あ、内緒よお。とのほほんとした顔で、美智子先生は、日誌を見せてくれた。

奈緒はそれを眺めた。今週だけで14人の打撲者がある。そのうち、三田の受け持ちクラスの生徒は11人いた。昨日の欄には、市原と川島の名前もあった。その半数が数学の授業中か、終わった時間だった。

「なるほど、これは確かに怪しいですねえ」

突然、頭から降つてわいた声に奈緒は「ひっ」と叫び声を上げた。ちらりと上を向くとそこには、あの新聞部部長の貫地谷晴彦かんじや はるひこがいた。眼鏡の奥の瞳が爛々と輝いている。

「貫地谷くん。確か、今は授業中だと思うんだけどなあ」

美智子先生は、呆れた目で藤堂先輩を見ている。

「ああ、大丈夫です。単位計算はばっちりですから。四時間目は、

自習時間に切り替えました」

眼鏡を指でつまみ、くいつと上げた貫地谷は、美智子先生に「お気遣い有難うございます」と笑顔で言った。そして、藤堂先輩は、奈緒に向き直り、がしつと奈緒の両肩を掴んで言う。

「昨日裕子くんから聞いた君の仮説に、僕は多いに感動しました。そして、君のこの行動力。素晴らしい。まずは情報を集める。これは鉄則ですよ。自ら怪我をして保健室に潜り込み、そして日誌を盗み見る。さすがです。君のその飽くなき探究心。まさに、僕に通じるものがあります。さあ、この謎を究明しようではありませんか」

奈緒は背中に冷たい汗をかきながら言った。

「いえ、そんなつもりでは」

奈緒は保健室に潜り込むために、ボールに当たった訳ではないし、日誌を盗み見た記憶もない。

「ふふふ。謙遜しなくてもよろしいですよ。この日誌は、彼の悪行を裏付ける証拠となるでしょう」

うふふふと笑いを漏らしている貫地谷に対して、奈緒は完全にひいていた。

しかしはたと気付く。

「……もしかして、私の考えを信じてくれるんですか？」

貫地谷は、首を傾げて言った。

「信じるも何も。疑問を感じたら、それを解明しなくては。それだけです」

昨日裕子から話を聞いて、貫地谷はやはり疑問に感じたという。

「この世には、不思議なことがたくさんありますから。もしかしたら、記憶を消す力というものが存在するかもしれないでしょう。ですから、それを調べるのです」

そこに、お昼休みを告げるチャイムの音が鳴り響いた。

「はいはい。あんたたち、なんだか熱く語り合ってるみたいだけど」

いや、私は熱く語ってないですと、奈緒は抗議の目を向けたが、美智子先生は

「病人以外は早く出てった出てった」

と奈緒たちを保健室から追い出した。

お昼はいつもの三人に貫地谷も加わり、奈緒は昨日、但馬に話したことを言ってみた。

「うーん。お守りみたいなもの、ですか」

「そうなんです。財布に入ってるかなあと思うんですけど」

そう話している奈緒と貫地谷を、夕紀と裕子は呆れた様子で眺めていた。

「で、三田先生の財布を盗もつて？ やめとき。冗談通じる相手やないわ」

「そうですね。財布ですか……」

夕紀の忠告をまったく聞かず、なにやら考え込んでいる貫地谷に、奈緒も一抹の不安を覚える。とんでもない方法を考えだしそうだ。

しかし、奈緒は貫地谷に期待した。もしかしたら、と。

結局、そんな淡い期待はその日の放課後、奈緒自身の行動によって儚く消え去った。

放課後、またもや水谷先生に拉致され、体育の資材を運ばされている奈緒は、今日の占いは真ん中だったのになあ、とぶつぶつ呟いていた。昨日の冊子作りがことのほか評判で、ただ単に水谷先生に目をつけられたせいなのだが。

今日も二人、怪我人が出たと聞いた。なんとかしなければと思うのだが、どうしたらいいのか。奈緒は考えあぐねていた。

旧校舎である技術棟は奈緒たちの教室のある新校舎とは違い、木造で出来ている。そのため、一步步くごとに、きゅっきゅつと床が

軋む音を立てる。

あと何往復したら、この作業は終わるのかなあと、ぼんやり考えた奈緒の耳に女子生徒の叫び声が聞こえた。はっとして、奈緒は辺りを見回した。

声は廊下の向こうから聞こえた。奈緒があたりをつけた教室は第一理科室だった。その扉を奈緒はゆっくりと開けてみた。ぎぎいとドアが音を立てる。中をのぞいて見ると、そこには——誰もいなかった。

ほっと息を吐くと、奈緒は扉を閉めようとした。しかし、その手は、再び聞こえた叫び声により、止められた。

「——助けてっ」

声は理科準備室の中からだった。途端にがたがたと理科室から続くその扉が揺れた。

「助けて！……っ！」

バシンと音が鳴り響いた。奈緒は悟った。殴られた音だ。誰かがいる。目を見開いている奈緒の前で、準備室の扉の鍵が開けられる音がした。そしてその扉が開くと、中から——三田先生が出てきた。

「なんだ、坂上じゃないか。どうした、こんな所で」

先生は奈緒の姿を認めると、つまらなそうな顔で言った。奈緒は足

が震えながらも先生に言った。

「水谷先生に、用事を頼まれて。——それより、先生。今、叫び声が……」

すると、先生は言った。

「ああ、気にするな。それより、お前、忘れろ、な」

と言って口の端を上げる。瞬間、彼の瞳の奥が赤く光ったように見えた。奈緒はその色に頭の中の何かが、蠢くような気持ち悪さを感じたが、特に変化は見られなかった。奈緒は先生に対して顔を強張らせ、言った。

「……何を、ですか？」

奈緒のその答えに、それまで余裕の態度でいた先生は、首の後ろを揉んでいた手を止めた。そして、奈緒を見た。不思議な顔で。そして、再び言った。

「忘れろ」

奈緒はじつと先生を見つめた。先生も奈緒を見つめた。奈緒は準備室に続く扉をちらりと見て言った。

「そこに誰がいるんですか？」

先生は信じられないという顔をして、奈緒を見ている。

「どいてくださいっ」

奈緒は準備室の扉のノブを持ったままの先生を、半ば突き飛ばす勢いで中に入った。

そこには、奈緒の考えていた通りの光景があった。女子生徒が半裸の状態で倒れていた。奈緒の知らない生徒だったが、制服の色から三年生だと分かった。かけ寄り、脈を測ってみる。大丈夫。動いている。呼吸もしている。気絶しているだけのようだ。頬についた痣が痛々しい。奈緒は先生を睨みながら言った。

「他の先生を呼んできます」

立ち上がった奈緒は、その場を一旦後にして、他の先生を呼んでこようと思った。まずは水谷先生に言って、それから美智子先生を呼ぼう。まだいる筈だ。

呆然としている水谷先生の横を通り過ぎ、理科室の扉を出た。と、奈緒はものすごい勢いで腕を後ろに引っ張られた。そのままの勢いで奈緒は倒れた。痛みで声を上げた奈緒に、三田先生は震える声で言った。

「なんだ、なぜ、お前、忘れない？」

そんなの知らない、と言おうとした奈緒に先生は馬乗りになって叫んだ。

「なんで忘れないんだ!？」

その手が奈緒の首にかけられた。あまりに強いその力に、奈緒はもがいた。締め上げる先生の両手を掴むが、外れない。苦しい。息

が出来ない。奈緒の視線は捉えた。その上着の内ポケットにある財布を。ああ、でも、もう、無、理。

奈緒の意識が途切れるその時、それは本当に突然の出来事だった。

「う、うつわああっ！」

水谷先生の身体が、吹き飛ばされた。天井に向かって。

気道を通った奈緒は咳をした。何度も何度も咳をした。涙で視界が滲む。新鮮な酸素が、咳をするたびに送り込まれてきた。奈緒は頭がくらくらしながらも、天井に張り付いて動けない水谷先生を見上げた。先生はまるで、重力が反転したかのように天井に張り付いている。

そして、奈緒の視線が理科室の扉に動いた。その先の廊下に彼はいた。

——右手を突き出して。

第二話「記憶が消える」(5)

(5)

天井に張り付いたまま、水谷先生が声を絞り出した。

「お前も能力者エスパーなのか……但馬」

奈緒は呆然として但馬を見た。但馬が能力者エスパーなのか。

水谷先生に向かって意識を集中している但馬の、その瞳は不安定に赤く揺れている。彼は低く呟いた。

「……さあな。……『も』ってことは、先生は、やっぱり能力者エスパーってことなのか？」

右手を先生に突き出したまま、但馬はちらりと奈緒を見た。奈緒はいまだ但馬が能力者だった驚きから、回復していなかったが、何とか頷いた。

そう確認する二人の元に水谷先生の声が響いた。

「……但馬あ、忘れろ！」

先生の瞳が赤く光った。その途端、但馬が放心した表情を浮かべた。次の瞬間、天井から、水谷先生の身体が落下し、音を立てて床に叩きつけられる。

「うぐう！」

呻く先生を前に、奈緒は焦った。但馬を見る。彼はぼんやりしたまま、奈緒たちを見ている。荒く息をついた水谷先生が、ゆっくりと立ち上がった。

「そうだ、但馬。忘れる」

もう一度ダメ押しのようになり、水谷先生は瞳を赤くして呟いた。そして先生はそのまま、驚愕の表情を浮かべたままの奈緒を見下ろした。

「まずは、お前の意識を無くしてやる。それから、あとは皆なかったことにしてやるんだ。……あとでお前ひとり何か言った所で、誰が信じるか！」

そう言いながら、奈緒に向かって足を蹴り上げた。奈緒は慌てて横に転がりそれを避けた。そして叫ぶ。

「但馬くん！」

彼は、はっと我にかえると、まるで今来た人のように、奈緒と水谷先生を見た。すかさず、先生が叫ぶ。

「但馬、忘れる！」

但馬の瞳の焦点がぼやける。但馬は頭を押さえ、呻いた。

「……うう」

奈緒は考えた。どうすればいい？ どうしたら、水谷先生を……。

水谷先生が奈緒を追いかけてくる。奈緒は、理科机の反対側に周りこみ逃げる。視界の隅になおも追いかけてくる先生の姿がある。

恐怖を感じながらも、奈緒は思いついた。そうだ。さつきから先生は何度も『忘れる』と言っている。きっと、彼も奈緒と同じように、口にしないとその能力は発揮されないのだ。ならば、但馬の持っている能力、ならば……。

向かってくる水谷先生から逃げながら奈緒は叫んだ。

「但馬くん！ 水谷先生の口を押さえて！」

その言葉に驚きをみせた先生は一瞬動きを止めた。そして、はつと但馬を振り返った。但馬は頭を押さえながら、驚いた目で奈緒たちを見ている。水谷先生は再び但馬に忘れさせるために口を開いた。しかし、一瞬但馬の反応の方が早かった。彼の瞳が赤く光る。

「但馬あ、忘れぐっ……うぐむ……む」

奈緒の目の前に慌てて口を押さえている水谷先生がいた。奈緒が理科室の入り口を見ると、眉を顰めながら赤い目をして、右手を突き出している但馬がいた。奈緒は言った。

「そのまま、押さえ続けて！ 絶対口を開かせたらダメ！」

「むぐんどうっ（こんのお）！」

先生が奈緒に向かって手を振り上げた。奈緒は咄嗟に頭をかばい、目をつむった。

だんつと派手な音がした。奈緒が倒れた音ではない。水谷先生が

壁に叩きつけられた音だった。先生が今度は天井ではなく、壁に張り付けられていた。

「むうぐぐ……」

口がふさがれたままの先生は何かを言おうとしているが、何を言っているのか分らない。

奈緒は力が抜けてへたり込んだ。

「助かった……」

そこに、緊張した但馬の声が聞こえた。

「坂上。説明しろ」

奈緒は但馬に、先程からのことをかいつまんで説明した。すると、但馬は眉をしかめたまま、

「なら、持ってるんだな」

と呟いた。すると、水谷先生の内ポケットから財布が飛び出し、但馬の手にそれは吸い込まれるように渡った。そして、但馬は躊躇することなく、中から一枚の黒いカードを手にした。くるりと裏返しそれを確認すると、但馬は呟いた。

「これは、ミゲルか……」

そしてそのカードを胸にあてて言った。

「ミゲルに告ぐ。我、新たな能力を授かるものなり」

すると、カードが淡く光り、そこから、4つ文字が宙に舞い上がった。

『みた こうぞう三田孝造』

奈緒はぼんやりと三田先生の下の名前は孝造だったのかあと思いながら、その文字が空中できらきらと崩れ、散る様を眺めていた。単純に綺麗だ、と思った。

そして『但馬修士』の文字が、但馬本人から浮き出て、そのままカードに吸い込まれるようにして消えた。

初めて見た。奈緒が契約した時も、あんな風に見えていたのだろうか。奈緒はいつも目をつむって唱えていたから見ていなかった。もったいないことをした。

その後、但馬は壁に張り付いたままの水谷先生に言った。

「先生。忘れてください」

と。そのまま壁からずり落ちて、座ったままの先生は、どこか心あらずの様子だった。

それから、隣の女子生徒の事を思い出した奈緒は、それを告げると、但馬は、隣の部屋に行き、ぼんやりと意識を回復させた彼女にも「忘れて」と言った。

そして、奈緒に向かって

「忘れる……………って言っても効かないんだろうな」

と奈緒に向かって、但馬はこれ見よがしなため息をつくど、

「お前、水谷呼んできて。俺はここで見張ってるから」

と声をかけた。

「どうするつもり？」

と不思議に思う奈緒に、但馬は説明した。自分たちはただ、放心状態の三田先生と女子生徒を発見した。それだけだ、と。後のことは知らぬ存ぜぬを貫き通すんだ、と。

それから、奈緒はありったけの演技力を振り絞ることとなった。

「水谷先生！ 大変です！」

と、大げさに喚きながら剣道の指導をしている水谷のところへ飛び込み、なんだなんだとやってきた先生に、

「理科室で人が！ みっちゃん連れてきます！」

と言って、そのまま保健室まで行き、美智子先生を連れてくる。そして

「通りかかったら、この有様で……」

と理科室の惨状を見せた。

三田先生も女子生徒もどうして理科室にいるのか覚えていないという。二人とも怪我をしていて、三田先生は骨折もしているようなので、そのまま救急車が呼ばれることとなった。

どこから聞きつけたのやら、貫地谷先輩が駆けつけると、すぐさまデジカメを取り出し、写真をぱしゃぱしゃと撮り始めていた。理科室の天井やら、斜め上やら妙な角度で撮っているので、思わず、何を撮っているのかと聞くと、

「霊体が映っているかもしれませんから」

と答えた。聞かなければよかった。

そして三田先生に財布を見せてくれと言い、水谷先生に怒られていたが、三田先生の「構いませんよ」の一言に、彼は財布の中身を調べ——最終的に、財布の縫合を解こうとしていたところで水谷先生に奪われていたが、調べ尽くしたことには満足した様子で、

「謎は深まるばかりです」

と言い腕を組み何やら思案すると、また何かしら彼の触手を刺激するものが現れたのか、

「それではこれで。失礼」

と嵐のように去っていった。

その間、但馬は何をしていたかというと、面倒事は嫌だといわんばかりに、すべての説明を奈緒に押し付けて、だんまりを決め込んでいた。奈緒の中で但馬は、マイペースで気が利いて、そして薄情者だ、という認識に変えた。

「『メモリーイレース
記憶消去』か……」

自転車を降りると、永谷神社の境内に上がる階段の下で、但馬は三田先生の持っていた黒いカードを眺めながら呟いた。契約者名はすでに『但馬修士』に替わっている。

「本当に、三田先生が能力者だったとは」

ひらひらとカードを振っている但馬に、奈緒はむっとして言った。

「自分も能力者だったなら、そう言ってくればよかったのに」

そうすれば、もう少し何かやり方があった気がするのに。ご立腹な奈緒に対して但馬は言った。

「言えるか、そんなの。お前だって言わなかっただろうが。お守りだとか言わずに、黒いカードって言えばよかっただろ。いや、お前が持つてるカード見せればよかったんだ。そうすれば、一発で信じた」

そして、奈緒は考えた。あの時、但馬にカードを見せることが出来たかを。答えは否だ。

「それは……無理だな。但馬くんが能力者だって知ってたら、見せれるけど、そうじゃなかったら……」

きつと、怖がられる。こんな能力。そんな奈緒の考えを読んだかのように、但馬は言った。

「ま、無理だろうな。俺だってこんな能力持つてるやつがいたら、警戒はするな。普通に、人として」

「そうだ。但馬くんの持つてるカードって何？ 見せて？」

すると、但馬は疑いの目を向けながら言った。

「見せてどうする。俺の能力奪う気か」

「そんなじゃないよ。ただ、何の能力なのかなって」

「俺が最初に拾ったのは、『サイキック物体移動』だ。別に見せなくてもいいだろ」

「……見せてくれたっていいのに。減るもんじゃないし。でも、サイキックか。いいな。強そう。……他には？」

「？ 一枚ただぞ。三田のをいれたら二枚か……ってお前、何枚も持つてるのか？ というか、お前の能力ってなんだ？」

「『サイコメトリ残留思念読取』だよ。ほら」

と奈緒は但馬に生徒手帳から、カードを取り出すと渡した。但馬は「お前は危機感ゼロだな」と呟きながらカードを眺める。そして、但馬はもう一枚のカードを見ていった。

「……こっちは空欄なんだな」

奈緒はそうなんだよね。と言ってから、

「あと、弟も一枚」

と付け足した。

「弟？」

「うん。今年、小学校に上がったの。幹雄っていの」

但馬は、奈緒にカードを返しながら尋ねた。

「ふーん。弟はなんだ？」

「『テレボーション空間移動』を持ってたけど、カードは落としちゃった」

但馬は呆れた顔を見せて言った。

「落とした？ カードをか？」

奈緒が頷くと、但馬は眉をしかめて言った。

「……なんか色んな意味で、お前たちつてすごいな」

奈緒は但馬のいう、色んな意味とはなんぞやと思ったが、但馬は「さて」と立ち上がると、

「そろそろ帰ろう」

と言った。それから、奈緒に心持ち、あごを持ち上げた状態で言った。

「あとお前、水谷の頼みごとを、ほいほい引き受けるな」

奈緒は眉をしかめた。別に、ほいほい引き受けているつもりはない。だからついつい咎めるような口調で返した。

「なんでよ」

「俺が巻き込まれるからだ」

そこで、奈緒は気付いた。今日、但馬が理科室に現れたのは、但馬が今日も助っ人で呼ばれていたからだ。

「断つたらいいじゃん」

と奈緒は不満をもらしたが、但馬はすでに、自転車に跨り、ペダルをこぎ始めていた。そして奈緒に向かって「置いてくぞ」とせかしていた。

自室のベッドに横になると、奈緒は今日あった出来事を思い返していた。

やはり三田先生は能力者だった。但馬が来なかったらどうなっていたのだろうと考え、奈緒はぶるりと震えた。今さらながらに、危ない橋を渡ったものだと思う。

但馬が『メモリーイレース記憶消去』の能力を持ったが、彼ならばおかしい方はしないだろう。彼は信用できる気がした。何故なのかは分からないが。

それから先ほど但馬と交わした会話を思い出して、思わず笑いを漏らした。まるで、小学生がカードゲームについて話すような会話だったからだ。

「さて、寝ますか」

と奈緒はひとり呟くと、部屋の明かりを消した。

眠りにつきながら、奈緒は思った。果たしてエスパーカードは何枚あるのだろうか。一体、誰が何の能力を持っているのだろうか。そう考え始めると、不安で胸が押しつぶされそうな感覚がした。

（どうか、明日は何事も起こりませんように……）

と願いながら、奈緒は深い眠りについていった。

—— またひとつ、時計の針が動いた音がした。

第二話「記憶が消える」了
第三話「噂の占い師」へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6378x/>

ESPER-CARD（エスパーカード）～黒～

2011年11月14日15時49分発行